

## World NTM awareness day : 増えてきている肺非結核性抗酸菌症

日本結核・非結核性抗酸菌症学会 理事・編集委員長・代議員  
菊地 利明 (新潟大学大学院医歯学総合研究科 教授)

8月4日は、非結核性抗酸菌 (non-tuberculosis mycobacteria/NTM) 症をより多くの方に知っていただくための「世界NTMデー (World NTM Awareness Day)」です。

NTM 症の多くは肺 NTM 症で、肺 NTM 症は浴室や土壌に遍在する NTM を吸入して発症し、慢性的な経過を辿る呼吸器感染症です。NTM には 200 種類以上の菌種が含まれていますが、それら菌種すべてが肺 NTM 症の原因になるわけではありません。本邦の肺 NTM 症は、その8割が *M. avium* あるいは *M. intracellulare* によるものであり、この2菌種による肺 NTM 症はしばしば肺マック (*M. avium* complex/MAC) 症と呼称されます。この肺 MAC 症の発症は50歳代から60歳代の中高年女性でやせ型の方に好発しており、肺 MAC 症の発症には体内ホルモン環境の変化や代謝状態が関与していると推測されます。

肺 NTM 症について患者数の増加が指摘されています。本邦の人口動態調査によると、2012年に肺 NTM 症で亡くなった方は全国で530名(男性215名、女性315名)だったのに対し、2022年には1158名(男性407名、女性751名)と増えております。2021年に肺 MAC 症の難治例に対してアミカシン硫酸塩の吸入用製剤が新たに発売となり治療法が進歩してきていることを考えると、この10年間で本症の患者数は2倍以上増えていることが推測されます。

この患者数が増えてきている肺 NTM 症に対して、日本結核・非結核性抗酸菌症学会と日本呼吸器学会が共同で治療指針を改訂し、2023年6月に「成人肺非結核性抗酸菌症化学療法に関する見解 — 2023年改訂 —」を発表しました。主な改訂点は、①これまで週7日間の連日内服のみだった肺 MAC 症治療に対し週3回の間欠内服の選択肢が提案されたこと、②肺 MAC 症の難治例に対して注射剤だけでなくアミカシン硫酸塩の吸入用製剤も勧められたこと、③しばしば治療に難渋する肺アブセッサス症についても治療の考え方が示されたことなどが挙げられます。

このように患者数が増加し、治療指針が整備されてきている肺 NTM 症ですが、非専門医にはわかりづらい面が多く、専門施設で主に診療されているのが現状です。例えば、肺 MAC 症患者の病勢は患者によって様々です。診断が付いてから早期に薬物治療を開始しなければならぬ方がいる一方で、数年かけて緩徐に進行する方や、無治療で様子を診ていると喀痰中の排菌がなくなってしまう方もいます。本症の病状が進行して亡くなる方がいることは事実ですので、診断したら早めに治療することは一般的に好ましいように思いますが、実際患者さんを目の前にして、治療を開始すべきか、しばらく無治療で経過を観察してもよいかの臨床判断はそれ程容易ではありません。

また菌種によっては、1年以上の多剤併用療法を行っても7割程の患者にしかならず、一旦治療が奏功しても休薬すると再排菌する患者も珍しくないことから、肺 NTM 症に対して適切な治療法が十分確立されているとは言い難い状況です。幸い現在新たな治療薬がいくつか開発されてきています。それらの治療薬が一般臨床で使われるようになって、肺 NTM 症の治療法が少しずつでも進歩していくことが期待されます。